

〔自伝小説〕

わが道を求めて

(最終回)

行方定めぬまま

長崎 明

さしえ 竹内秀明

高砂踊り

全国旧制高校寮歌祭の名物に「高砂踊り」がある。これぞ、知る人ぞ知る台北高校の寮歌と踊りである。「ホーライ、ホーライ。ホーライ、ホーライ。ここ台高に、とこのなつ」をかけ声に、高砂族の衣装そのまま、舞台狭しと踊りまくる。新潟でも毎年六月、イタリヤ軒のサンマルコを借り切って開かれる。総勢二百余名、大部分が旧制新潟高校だが、台北高校も六、七名が県内外から馳せ参じる。「青春のノスタルジア」と言ってしまうばそれまでだが、旧制高校には何か失われたものへの憧

懐がある。

「弊衣破帽、黒マントに朴齒の下駄、腰には醬油で煮しめたような手拭」のいでたちは台北高校でも変わらなかつた。なにしろ、真冬でも吐く息が白くなってやっと「寒い、寒い」と言うくらいのも、汗をかきかき、お馴染みのスタイルを守っていた。これも肩肘を張った青春の一コマであった。

台北高校は、一九二二年創立から四六年閉校までの二十四年間に、二千八百名（うち七百名は台湾人）の卒業生を出した。文部省直轄ではなく、台湾総督府文教局の所管であったが、全国から熱血あふれる教師が相集い、植民地としては珍しく自由な空気に包まれ、全島から集まった在校生は、のびのびと各自の資質を伸ばすことができた。

私は理科甲類だったので、英語の授業が週十五時間くらいあった。島田謹二、石黒魯平、小山捨男、中野賢作の諸先生がおられた。石黒先生は既にお亡くなりになったが、ご遺族が新潟市にお住まいのようである。心理学の今崎秀一先生は、教科書に原書（英語）を使われたので、心理学より英語の方が勉強になった。どういうわけか、サブコンシャスネス（潜在意識）なる用語だけが記憶に残っている。当時も今も英語の授業は文章の翻訳が主だから、これだけ勉強したのに英会

話は全く身につけていない。今ごろになって、旅行用英会話をテープで独習をはじめてみたが、付け焼き刃で物の用に立ちそうもない。

国語には万葉集の研究で著名な犬養孝先生がおられた。私が新潟大学の学長をしていた時、全学講義において頂き、三十

十有余年の年月を隔ててお目にかかったが、ご高齢になられたにもかかわらず、あの明々たる犬養節は、学生をすっかり魅了してしまつた。

微分・積分は加藤平左衛門先生に習った。先生にはまた一年次の時の学級担任



おでん屋で一杯



としてお世話になった。ご自分の著書を教科書に使っておられたが、難しくてさっぱり理解できなかった。後日、東大前の書店で先生の本を見つけ、懐かしさにはばらくページをめくったが、難しいことには変わりがなかった。解析・幾何の嶺脇四郎先生はバイオリン奏者でもあって、出欠をお取りになる時、身体を斜めに鉛筆を構える姿は演奏スタイルそのものであった。嶺脇先生の講義もまた加藤先生以上に理解しにくかった。多分私には数学の才能がなかったに違いない。理科系を選んだことを今もって悔やんでいる。数学にはこのほか甲斐三郎先生、服部先生など全国的に有名な方がおいでになった。服部先生には直接習ったことはないが、ご長男の服部学氏は、私が一九七五年十一月、国連へ核兵器廃絶の要請にでかけた時、ずっとホテルが同室の間柄で、雑談の間によく「そうだ」と分かった。服部氏はその後原水協を離れてしまった。残念至極である。ちなみに彼も台北高校の二年後輩であ

る。

ともあれ、私たち一九四〇年（昭和十五年）三月入学組は、二年次末のある日、突然、在学年数を半年短縮する旨を申し渡された。自由な青春を謳歌していた高校生活を、半年もぎ取られてしまうのは、大変な痛手であったが、戦局はそこまで厳しさを増していた。入学以来剣道部に入り、勉強そのので竹刀を振り回していたので、どこに進学すべきか、何の準備もなかった私には、青天の霹靂（へきれき）のごときショックであった。当時既に台湾総督府の委託学生になっていたので、南方進出に役立つことを信じて農業土木学科を選び、どうせならと東京大学に進むことにした。当時の私は万事行き当たりばったり、これぞ正に「高砂踊り」の真髓といふべきか。「ああ、高校三年生」などと感傷に浸っている余裕はなかった。

台北高校の同年次組

台北高校の同窓会は「蕉葉会」を称し、二年に一回名簿を作製している。最新の一九八九年十一月版によると、同年次に卒業した諸君一四五名の動向は別表のとおりである。

まず二三％が故人となっているのに驚く。戦前、

台北高校1942年9月卒業生の動向（単位：名、％）

科・類	文甲	文乙	理甲	理乙	合計 (平均)
卒業者	39	36	33	37	145
逝去者	9	12	4	9	34
（同上率）	(23)	(33)	(12)	(24)	(23)
生存者	30	24	29	28	111
勤務先あり	20	19	15	22	76
（同上率）	(51)	(53)	(45)	(59)	(52)
文科系大学卒	20	18	1	0	39
理科系大学卒	10	6	27	27	70
大学進学せず	0	0	1	1	2
医師	6	3	6	12	27
教職員	4	1	1	2	8
企業	4	11	7	8	30
公務員	4	3	1	0	8
その他	2	1	0	0	3

1989年（卒業後47年）現在の蒞会会員名簿による

戦中、戦後を通して最も辛酸をなめた年代だから「さもありなん」と思いつつもよく見ると、科・類によって著しくアンバランスがあるのに気が付く。逝去率では理甲卒が最低である。理乙、文甲の二分の一、文乙の三分の一にすぎない。他の科・類に比し理甲卒は苦勞が足りなくて長生きしているということか。また、文科卒で理科系の大学・学部に進学した者の率は二十％にもなり、その半数は医師になっている。当時、理科系とりわけ医学部は徴兵延期が認められたためでもあろうか。六十八歳以上になる今日なお勤務先のある

者の割合も理甲以外の科・類が多い。理甲卒は苦勞が足りない割りに「功なり名遂げた」のか、潰しが利かないということか。理甲に合格するための中学時代のガリ勉が、そのような人間像を作り上げたのに違いないと、私の経験から思い当たる。

私たち同年組は科・類を越えて、毎年二、四、一〇月の第三水曜日に例会を持つことにしている。来年が卒業五十年目に当たるというのに、この例会は一度も欠かしたことがない。世話人は文甲卒の蔵本人司君である。場所は神田・学士会館か渋谷・道玄坂の台湾料理屋が選ばれる。私は出席の悪い方で、これまで三、四回しか出席したことがないが、出かけるとそれなりに面白いこともある。数年前、たまたま邱永漢氏と隣り合わせになった。彼は「お金儲け」の大家で著書も多い。あまりの著名人なので恐る恐る「あなたは、さぞやお金が残って困るでしょう」と聞いたら、彼は呵阿大笑していわく「ほんの印税程度ですよ」と。それだけでも大したものには違いないと、金儲けの下手な小生、下司のごとく勤ぐった。

文乙卒の川崎寛治氏は人も知る社会党の衆議院議員で、舌鋒鋭く政府を追及する様はさすがである。あの大声と姿勢の良さは剣道部で鍛え上げたもので、たしか在学中に三段になっていたかと思う。例会では政治



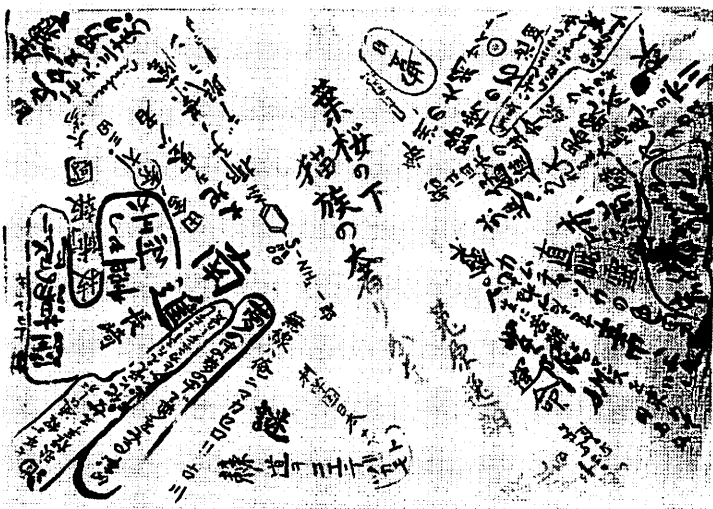
向きの話をしたことがない。

同級、理甲卒の三宅（渡辺）三郎君は阪大理学部物理学科に学んだ俊秀で、何とかという宇宙線の研究に長野県の山のトンネルに潜り込んでいたようだ。寺田一郎君は台北大学医学部を卒業して、新潟大学講師の後、本巣水原郷病院長を務めている。講師時代から現在に至るまで、家族の病気のことで大変お世話になっている。

ちなみに、一年後輩の文甲には傑物が多く、伊藤栄三郎氏は新潟日報編集局長で辣腕をふるった。吉里邦夫氏は文部官僚を務め上げた。李登輝氏は台湾人とし



1941年10月、台北高校2年次（18歳）



1942年6月、台北高校卒業（見込）寄せ書き



1942年10月、東大入学記念（19歳）

ては初めて中華民国（台湾政府）の総統になり、現在も政権を維持している。

東京大学の頃

私が入学し卒業したのは紛れもない東京帝国大学なのだが、卒業後は余程の公式文書でなければ「帝国」を入れない。東京大学の正門には今でも「菊の紋章」が厳然と光っている。現憲法下でそれを不思議とも思わない感覚が恐ろしい。

しかし、そこに入学したときの私は確かに「帝国」

に憧れていたし、誇りにさえ思っていた。三年後には軍国主義少年が軍国主義青年に成長するはずだった。それをぎりぎりのところで踏み止まらせたのは、何だったのだろうか。

敗戦による戦後民主主義の影響といえ、そうに違いないが、私は、あるいはもっと以前から「帝国」にいい知れぬ疑念を抱くようになっていたのかも知れない。恐らく、のしかかる東京での生活不安、しだいに焼野が原となる東京の街、家族と文通さえ出来なくなる寂しさ。勤労働員で出かけた農山村の疲弊。それにもかかわらず、そこで働く婦人・老人・子ども達のたくましさ。「人間が生きたとは何だったのか」の懷疑の芽生え。それにもまして、自分が大学で学んでいることの意義への反問。答えの出ない苦悩が続いた。

そして、その苦悩を本郷や神田の古本屋で癒すことを覚えた。古本の山の中に行くと、母の懐にでも抱かれているかのような安堵感が湧いた。それは、五、六歳の頃、毎朝のように、そっと寝床を抜け出して、ぶつぶつと一人小学一年の教科書を読み耽った思い出につながった。

そんな時、農学部前の古本屋で、ふと「この先生は睨まれて講義が出来なくなつたんだ」との会話を耳にした。そっと横目で見ると「日本農業経済論、近藤康

男著」とある。その隣に「農業簿記学、近藤康男著」が並んでいる。古本の棚でなく新本の棚である。それも昭和十七年十月三十日の初版とある。両方で定価七円三十銭。どうしてもほしくなった。しかし、当時二食付きの下宿で三十円出せばまずまずの暮らしができた。私は台湾総督府の依託学生で月六十円を支給されることになっていたが、それも滞りがちだったから、この金額は大きかった。毎日のように通って十数日後にようやく購入を決心した。これが私とマルクス経済学との初めての出会いであった。もっとも、その本にはマルクスのマの字も書いてなかったが。

その本には、農業生産における労働の意義が記されており、その労働手段かつ労働対象として土地が位置付けられ、その土地の利用価値を高めるために土地改良なる技術がある、と述べられている。戦局の厳しさの中で、南方進出のための農業土木に挫折感を抱きつつあった私には、この土地改良（農業土木）の性格付けは素晴らしく新鮮に思えた。

一九四五年八月十五日、私は神奈川県相模原台地に陸軍の地下司令部を構築するための測量に動員されていた。雑音だらけのラジオ放送ながら、日本の敗戦を知るには充分であった。久し振りに戻った東京は、見渡す限り真っ平になった感じで、上野駅から東京大

学の建物がくっきりと見えた。九月卒業の予定であったから、授業どころではなく、就職先を探さねばならなかった。台湾総督府依託学生の義務も権利も無くなったのだから、どこに勤めようと自由であった。私は農林省の研究所に入りたい旨を教授に申し出た。

埼玉県鴻巣の農事試験場に入ってびっくり仰天。そこには農業土木部門は無く、配属されたのは農機員部であった。東京大学には農業機械学講座がなかったのだ、九州大学からの非常勤教授に三日間の集中講義を受けただけだった。しかし、この鴻巣で私は農業機械の勉強と労働組合運動に情熱を傾けた。

最終回に当たって

早いもので、この連載を書き始めて四年、十五回になりました。こんなに長く続けるつもりではなかったのですが、私自身が楽しくなって、ついつい「長っ尻」になってしまったのをお許し願います。やや尻切れとんぼですが、この辺りで失礼致します。貴重な誌面を提供して下さった編集部に心から謝意を表します。また、筋書きの定まらないまま書きながら、挿し絵を描いて下さった竹内秀明さんに大迷惑をおかけしました。全くの無報酬で毎号誌面を飾って下さったご好意に対し厚く御礼申し上げます。

（ながさき あきら）にいがた県民教育研究所理事長